ふし作りにおける個の表現
― 4年「ぼくのふし　わたしのふし」―

真　田　美智子

1.「ぼくのふし　わたしのふし」

(1) 題材について

本題材は，児童一人ひとりが自分なりのふしを作り出して表現活動をするものである。これは，新学習指導要領の内容A表現(4)「音楽を作って表現できるようにする。」という項目の，ア「旋律や音の組み合わせを工夫して表現すること。」にあたる。低学年の頃より指導してきたリズム遊びやふし遊びをさらに発展させたものであり，ある程度まとまりのある旋律やリズムを即興的に表現させることがねらいである。この活動の過程で，表現意欲や表現に必要な基礎的能力を高めていきたい。

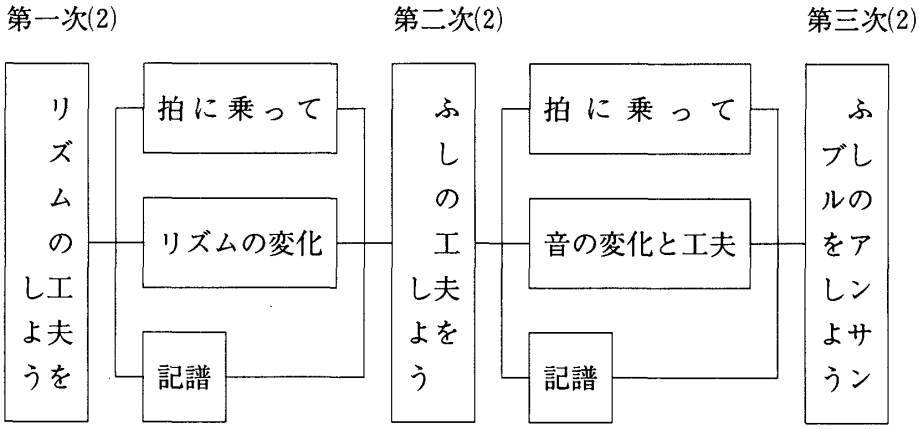
指導に当たっては，4年生の児童が無理なく自然にふしを作って表現できるような場の設定が必要である。そこで，本題材では，基本パターンとなるリズムを示し，拍に乗って模倣しながらリズムやふし作りをさせたいと考えている。ふし作りのための楽器としては木琴を使用し，ふしの構成音をいくつかに限定しておく。木琴でそれらの音を鳴らしながら個々のふしの工夫をさせたい。また，拍に乗って，一人ひとりあるいはグループで表現する場も設定し，互いのリズムやふしを聴き合わせ，拍に乗って表現する楽しさを味わわせたい。さらに，「ぼくのふし　わたしのふし」をグループで組み合わせたり，重ね合わせるアンサンブルへと発展させていく。

(2) 指導目標

① 自分のふしを作り，拍に乗って表現させる。

② 自分たちの音楽を作って表現する楽しさを味わわせる。

(3) 指導計画（6時間）



(4) 授業設計の焦点

個々の児童のふしを育てていくために次のような点に配慮して指導にあたる。

① ふし作りの筋道の具体化

この学習は，既成の音楽を歌ったり演奏したりする活動ではないので，何をどのように作り出していくかがわかるように児童の活動のめあてを具体化しなければならない。そのために，基本となるリズムやふしを示すことから活動を始めることにした。そのリズムやふしを模倣しながら，自分なりのリズムやふしを作らせたいと考えている。

② 音楽的な満足感を味わわせる場の構成

活動そのものが音楽的な満足感を味わえるものであることは，音楽の学習にとって不可欠である。単に教師の示したものの模倣をするのではなく，拍に乗って自分の力で工夫したリズムやふしを表現したり，みんなに聞いてもらう楽しさや緊張感を味わわせたい。

③ 個々の児童が自由に活動できる場の設定

リズム作りは，手拍子やひざ打ちなど，それぞれの児童の身体を使って行うことができるが，ふし作りでは，実際に楽器にふれながら行うことが望ましい。また，楽器は児童があまり抵抗なく演奏できるものであることが必要である。できるだけ多くの楽器にふれ，演奏しながらふし作りができるような場を設定したい。楽器は，音質及び児童の演奏技能を考慮して木琴とする。

2．授業の中での個の表現（ふし作り）

(1) 指導の実際（第二次第１時）

① 目標　「ぼくのふし　わたしのふし」を作って表現させる。

② 準備　木琴（９台），ふしの記譜用プリント

③ 評価の観点

表現力の	歌唱	
	器楽	自分のふしを木琴で表現することができる。
	即興表現	工夫して自分のふしを作ることができる。
鑑賞の能力		
音楽に対する関心態度		意欲的に自分のふし作りに取り組む。 仲良く楽器を使うことができる。

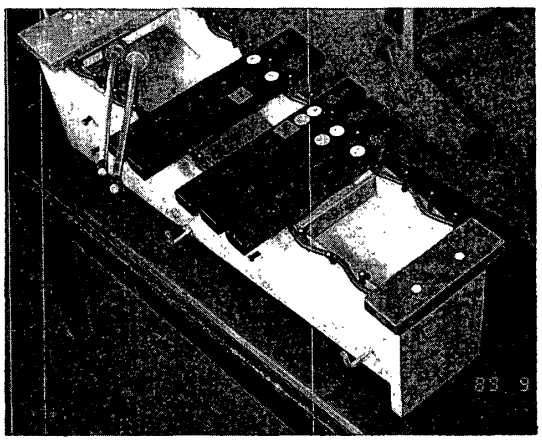
④ 指導過程

学習過程	指導上の留意点
1 リクエスト曲を歌う。	1 音楽学習の始まりに位置づけている。「みんなの歌」より２名の児童にリクエスト曲を１曲ずつ歌う。
2 リズムエコーをする。	2 これまでに行った活動であるが，リズムの形や音を変化させて，いろいろなリズムパターンに慣れさせる場とする。
3 ふし作りをする。 先生のふし 音の高さ　ふしの長さ 自分のふし作り 方法　約束	3 ♩♩♩♩｜♩♩♩𝅗𝅥‖のリズムによる先生のふしを示す。使う音は，レ，ミ，ソ，ラ，シの５つまでとしその中から，一人ひとりが使う音を選ばせる。音をわかりやすくするためにオルフの木琴は５つの音板のみ残し，その他の木琴は５つの音板にシールをはっておく。 自分のふし作りを行いやすくするため，次の二点に留意する。①楽器を鳴らしながらふし作りが行えるように教室に木琴９台を設置しておく。②楽器の数が限られているので，交代しながら仲良く使うことを約束する。
4 「ぼくのふしわたしのふし」を発表し合う。	4 一人あるいは何人かでふしを発表する場を設ける。互いにふしを聴き合わせ，本時のまとめとする。

⑤　指導の実際

授業の流れ，教師の主な発問	児　童　の　反　応
1．リクエスト曲を歌う。	
2．リズムエコーをする。	
3．ふし作りをする。 ・♩♩♩♩　♩♩♩𝄽(リズムエコー) ○「今のリズムで木琴を打ってみます。」 • ミ，ミ，ミ，ミ，ミ，ミ，ミ，𝄽 • ミ，ソ，ラ，シ，ラ，ラ，ラ，𝄽 ○「どこが違う？何が違う？」 ○ 今日は，こうやって，音…つまりどれもみんな関係あるんだけど，音の高さを変えて，自分の節，ぼくのふし，わたしのふしを作ってもらおうと思います。」 • 2番目のふしを板書する。 ○ これに書けたら書いてみて。 （学習プリント配布）	• ♩♩♩♩　♩♩♩𝄽 ○「音，ふし，うつ所，音の高さ」
4．ふしを発表し合う。 ○「作ったふしを発表しよう。」 ○「上野君」 ○「合ってた，これ？」 ○「もう1度やってもらおう。合ってたら拍手しよう。」 ○「田中君」 ○「宮井君」 ○「中川君」 ○「一人ずつ順番にやっていこう。」	• ♪♪♪♪♪♪♪♪　♪♪♪♪♩𝄽 ○「わからん」 ○「全然違う」 ○「合ってた合ってた」 • 上野君　再度発表 • 拍手する。 • ♩♩♩♩　♩♩♩𝄽 • 拍手する。 • 笑点のリズム（拍は合っている） • 笑い，アンコールという声 • 拍手は数名 •（試演奏後）♩♩♩♩　♩♩♩𝄽 • 拍手する。 • 一人ずつ　ふしを発表する。

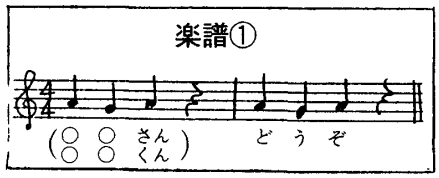
写真①



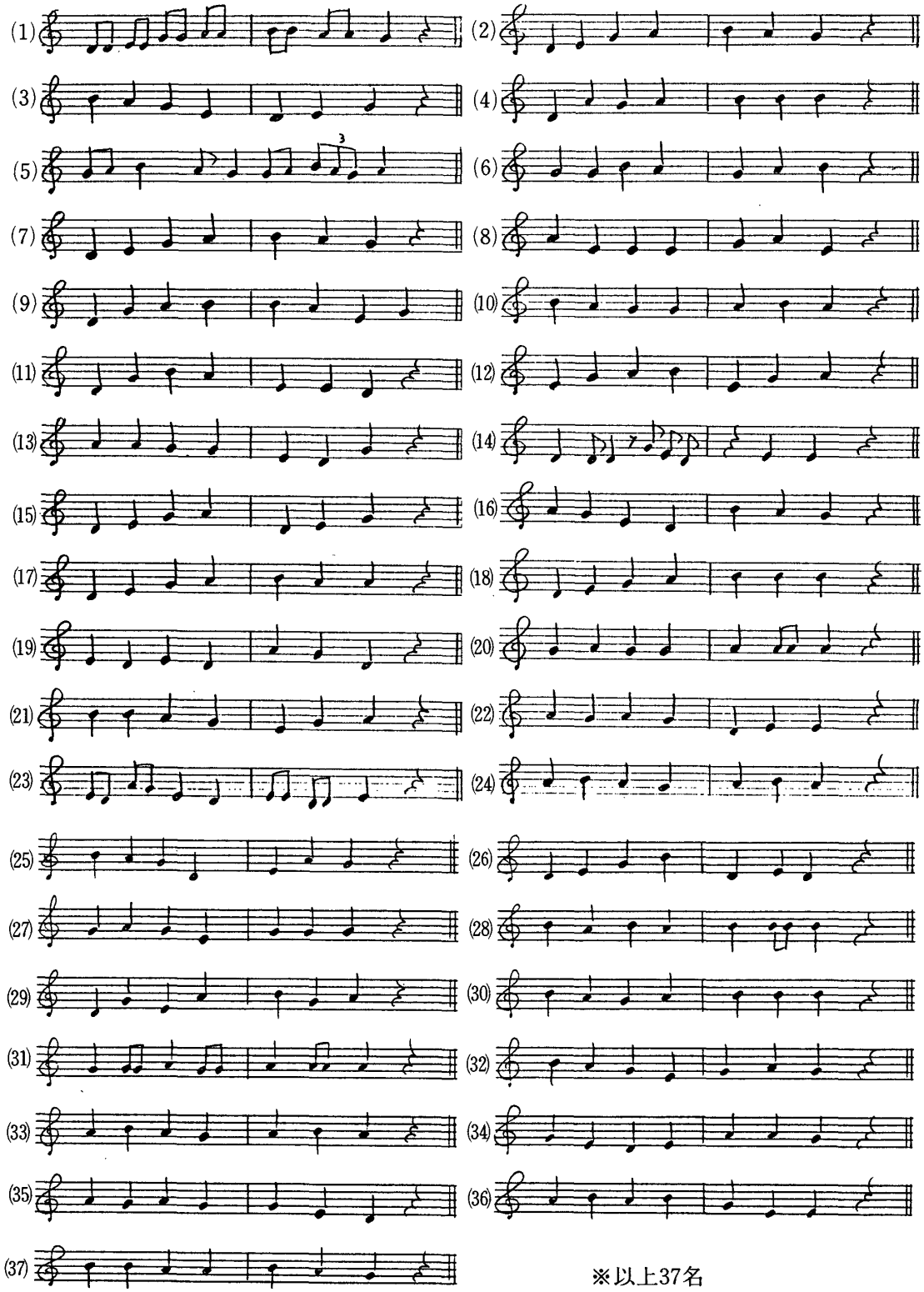
写真②

(2)　発表された「ぼくのふし　わたしのふし」

学習過程４で，一人ずつ「ぼくのふしわたしのふし」を発表する場を設定した。楽譜①の後に続けて表現する。次の楽譜は児童が一人ずつ発表したふしである。



（拍子記号略）



※以上37名

3．児童個々の表現についての考察

発表された「ぼくのふしわたしのふし」

ふしのタイプ	児童	人数
ア　教師が示した♩♩♩♩｜♩♩♩𝄽‖のリズムで表現した児童	(2),(3),(4),(6),(7),(8),(10) (11), (12), (13), (15), (16), (17) (18), (19), (21), (22), (24), (25) (26), (27), (29), (30), (32), (33) (34), (35), (36), (37)	(29名)
イ　♫のようにリズムを変化させて表現した児童	(1), (20), (23), (28), (31)	(5名)
ウ　既成のふしを発見して表現した児童	(5), (14)	(2名)
エ　♩♩♩♩｜♩♩♩♩‖のリズムで表現した児童	(9)	(1名)

＊計37名＊

楽譜②

楽譜②は教師の示したふしである。児童個々のふしを見てみるとリズムや音の高さを変化させて，多様なふしを作り出しているのがわかる。

アのタイプは音の高さを工夫したものである。

さらにリズムの工夫も見られるのが，イのタイプである。♩♩♩♩｜♩♫♩𝄽‖（2名），♫♫♫♫｜♫♫♩𝄽‖（1名），♫♫♩♩｜♫♫♩𝄽‖（1名），♩♫♩♫｜♩♫♩𝄽‖（1名）のような工夫がみられた。

ウのタイプは，既成のふしを自分で発見して表現したものであり，どちらも5つの音の中からふしを見つけ出している。

エは，最後に休符をいずれ8呼間音を打って表現したタイプである。児童（9）の演奏を聴いた後，「あれ？」という反応があった。切れずにまだまだ続く感じのするふしである。本題材ではある程度まとまりのあるリズムや旋律を作ることがねらいなので，まとまりについても指導する必要がある。

次に，楽譜からだけではわからない児童個々の表現する姿についてふれてみたい。

「○○さん，どうぞ」を受けて拍に乗って表現する児童，拍にのりおくれてもう1ど表現する児童，途中で止まってやり直す児童など様々な姿がみられた。

(23) の児童は，八分音符を使ってリズムの工夫をしているが，思うところにばちが打てず，何回か演奏しなおしている。(20) の児童も同様である。打とうとした音のとなりの音板を打つなど，途中で止まったり演奏し直したりした児童もいる。(2)，(8)，(9)，(12)，(13)，(14)，(35) の児童である。レ，ミ，ソ，ラ，シの音にシールを貼ったり（立奏用木琴），その音以外の音板を取り外して（オルフの木琴），技術的な抵抗の少ない方法を試みたが，9名の児童に演奏のしにくさがみられた。ふし作りや発表などの活動を通して表現技能を高める指導を積み重ねていきたい。

（5）の児童は，「チャルメラ」のふしを発見して表現したが，♩♩♩♩｜♩♩♩𝄽‖の拍に乗って表現することがむずかしかった。限られた音で知っているふしを発見した喜びは見られたものの，拍にのっていなかったふしであることははっきりさせたい。

4．まとめと今後の課題

(1) まとめ

授業設計の焦点に照らして指導を振り返ってみたい。

①基本になるリズムやふしから始まった表現活動により，37名の児童は自分なりのふしを持つことができた。
②自分のふしをみんなの前で演奏する場を持つことは，目的を持ったふしの工夫につながった。
③演奏楽器を木琴としたことは共通の活動の場を作ることになり，互いのふしを確かめ合うことになった。

(2) 今後の課題

① 個々の表現を集団の中にどう位置づけて高めていくか。

本題材では，個々の表現をみんなの前で発表し聴き合う場を設定した。さらによりよいふしを求めていくためには，それぞれのふしを集団の中に位置づけ評価し合うことが必要である。

② 音楽作りの活動をどう児童に具体化するか。

音楽を作って表現することは，既成の音楽による表現にはない良さがある。児童の発達段階を考慮し，作る楽しさを味わいながら表現力を育てる活動の場を工夫したい。